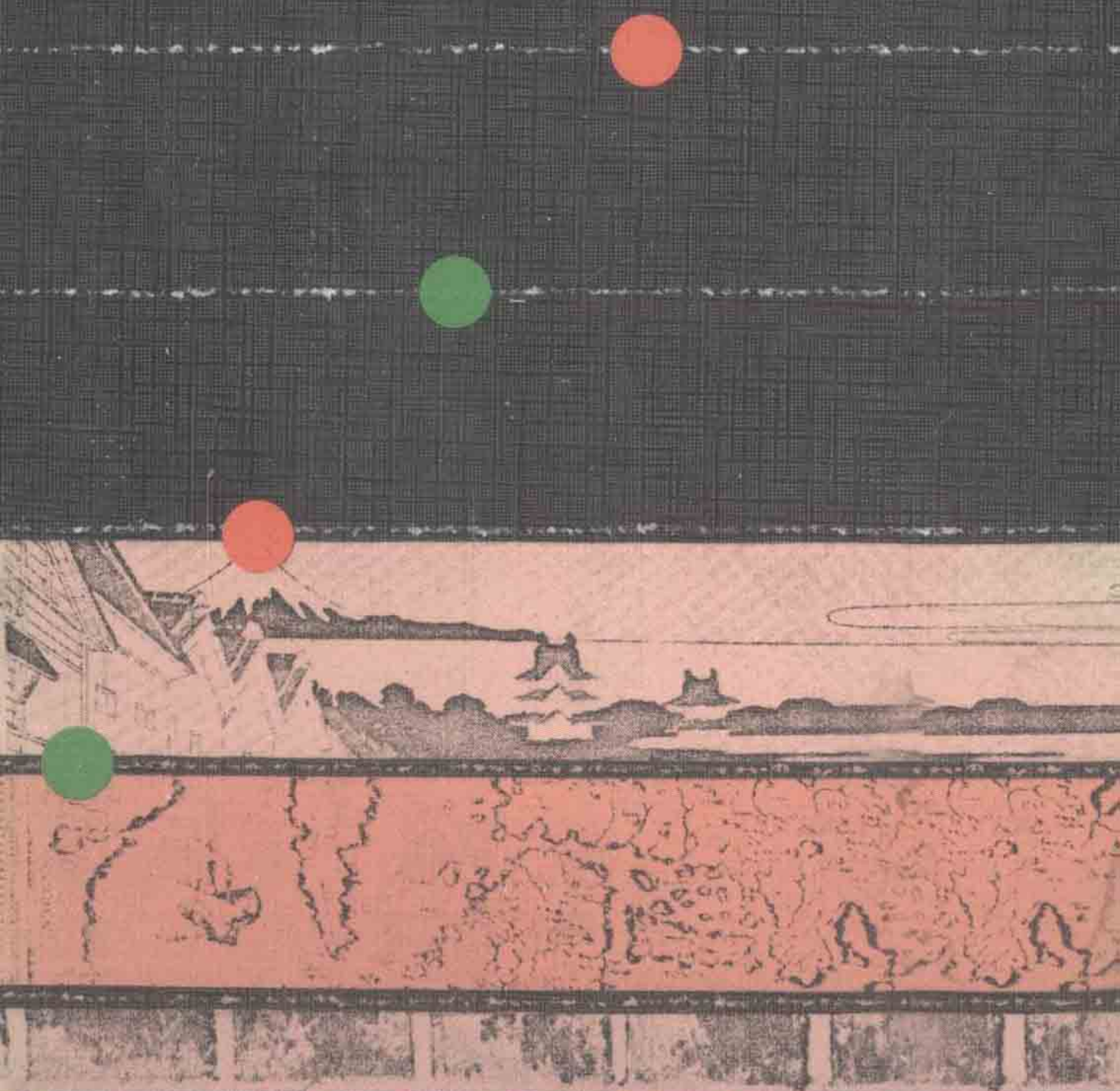


雄氣堂々

(下)

城山三郎



新潮文庫



ゆう とう き どう
雄 気 堂 々
下 巻

高校図書館用

新潮文庫 草 133 D

昭和五十五年四月一日発行

著者

城山三郎
しろやま さぶろう

発行者

佐藤亮一
さとう りょういち

発行所

株式会社 新潮社
郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一
電話 編集部(〇三)(二六六)五一
振替東京四一八〇八番

装幀 荒木哲夫

印刷・錦明印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Saburō Shiroyama 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

雄 氣 堂 々

下 卷

城 山 三 郎 著

新 潮 社 版

2331

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

雄
氣
堂
々
下
卷

省中ただ雑沓

新政府の高官に――。

栄一は、わがことながら、あまりにも紆余曲折した人生に、苦笑がにじみ出た。

栄一にひき比べ一本気な喜作は、慶喜のために最後まで戦おうと五稜郭にたてこもっていたが、幕軍の降伏によってとらえられ、三年の刑に処せられて、いまは陸軍監獄の中に居た。いつか大沢逮捕のため同道した新選組の土方歳三は、箱館で戦死している。

それに比べ、栄一だけが新政府の中枢に――。

だが、栄一は、そうしたことは、あまり気にしなかった。彼等は彼等だと思う。多少の運の差はあったであろうが、彼等は自分でその道を選び、今日の結果をつかんで行ったのだ。栄一の責任ではないし、栄一には栄一の道がある。気をつかうのは大毒である。

静岡では、慶喜がすでに謹慎をとかれていた。暗い感じの宝台院を出て、栄一たちの居た代官屋敷に移り、東京から夫人を呼寄せ、閑居の生活に入っている。ときには、気ばらしに鳥撃ちなどに出かけたりもしている。さしあたって、慶喜の身の上について案ずることはなかった。

栄一は、湯島に一戸を構え、静岡から妻子を呼寄せた。栄一が出世することであり、また郷里にも近くなるので、千代はよろこんで東京へ移った。

引越しの道中も、千代の心はずませた。川を渡るときは輦れんたい台、箱根路もふくめて他は駕籠かご。その上、従者が何人もついた。「渋沢租税正そせいのかみさまのおとおりと」と、はずかしいほどの大声で先触れが行く。人々の目が見上げてきて、まぶしい。

栄一が湯島に用意した家は、湯島天神の石の鳥居を過ぎたすぐ先の坂の下にあった。門は古びてきたなかったが、家は新しかった。火事で焼けた後、持主の旗本が新築したばかり。それを御一新のため手放したもので、庭も四百坪近くあった。

千代はほっとした。静岡では、永い間待望していた家族そろってのくらしはできたが、家はいつも大きな建物の一部を借りるという形であった。湯島にきて、ようやく水いらずで、一軒の家に落着いたわけである。もはや、何の気がねもない。永かった苦勞がこれですっかり報われた上、おつりがくる感じであった。

湯島に住んでまもなく、横浜まで蚕種を売りに行くのだといって、血洗島から市郎右衛門が出てきた。

門まで出迎えに走り出た千代に、市郎右衛門は、他人行儀に一礼していった。

「奥さま、何もここまでお迎えになるには及びません」

ききちがえたのか、からかわれたのか。千代はおどろいて舅しゅうとの顔を見直した。

「歌子さんは、達者でいるかね、奥さま」

市郎右衛門は、また「奥さま」という呼び方をした。

「奥さまって……」

千代は、おそろおそろ問返した。市郎右衛門は、目で千代のことだといった。

「いやですわ。いったい、どうなさったのです」

市郎右衛門は、まだ直立したまま、

「ところでお殿さまは、いつごろ御帰宅かな」

「お殿さま？」

「栄一のことです。これからわしは、お殿さまと呼びますから、そのように心得て下さい」

「それで、わたしが奥さまなのですか」

「さよう」

市郎右衛門は、まっすぐ千代の目を見ていった。

千代は、そこに膝をつき、市郎右衛門にすがってゆさぶりたい気がした。御一新のせいで、市郎右衛門までおかしくなってしまったのか。それとも、郷里をすてた栄一や千代へのいやみなのか。

「そんな風にお呼びになつては、もったいなくて、御返事もできないではありませんか。なぜ、そんな風にお呼びになるのです」

「わしは、栄一には、ただ田舎の家をかたくまもらせる教育をただけじゃ。それなのに栄一がこのような身分にまで出世したのは、まったく栄一自身の才能と努力によるもの。わしのせがれとはいっても、もはや、わしとは別の人間じゃ。それに、これほどの官位をいただいて朝廷にお仕えする朝臣を、親だからといって、どうして軽々しく名で呼ぶことができよう」

市郎右衛門は、本気で、そのようにきめこんでいた。

千代は困惑した。それから先は、困惑のしっぱなしであった。

市郎右衛門に手水ちようずをつかわせても、

「かたじけない、奥さま」

お茶を出しても、二言目には、

「奥さま」

千代はたまりかねて、

「おねがいでございます。せめて、わたしだけは千代とお呼び下さい」

「いや、なりませぬ」

市郎右衛門は、皺しわの寄った首を横に振り続ける。千代への話しぶりも、血洗島のころとはすっかり変って、同輩か目上の人に向うようにていねいである。

千代は、わが家に居ながら、まるで雲の上を歩いているように落着かなくなった。自分が自分でなくなる。あとは栄一の帰るのを待って、栄一から説得して翻意してもらう他なかった。

夕方、役所から戻ってきた栄一は、千代の話をきいて苦笑した。

「相変らず四角四面な父上じゃ」

栄一には、それが父市郎右衛門の健在の証拠のようにも思えた。ただ、栄一としても、父親に「殿さま」と呼ばれてはくすぐったいし、千代の当惑も救ってやらなくてはならぬ。

夕食を共にしながら、栄一はしきりに市郎右衛門を口説いた。

だが、たのしそうに談笑していた市郎右衛門も、その話になると、ふいと箸はしを置き、ふきげんになる。

「わしが考えがあつてそう呼びたいというのに、なぜ、おまえたちがとがめ立てをするのじゃ」

半ば怒り、半ばうらめしそうである。

栄一は、匙さじを投げた。

「まあ、呼ばせておくさ」

夕食が終り、別の部屋にきてから、千代にいった。

「それでなければ、父上の気がすまぬといわれる以上、仕方がないではないか」

「でも、わたしは……。わたしは困ります」

千代は悲鳴をあげた。

「おれだって困る」

「それなら……」

「親孝行だと思って、がまんするのだ。自分は百姓、息子は殿さま。はつきりそう呼分けることで、たしかに息子が出世したと、父上は満足されたいのであろう」

栄一はそういつてから、微笑してつけ足した。

「氣にするな。これからおまえは、千代ではなく、奥さまという名に改名したと思えばよい」
四角四面な父親に降参した形になった。

だが、続いて、もっと困ることが起った。いざ就寝という段になって、栄一夫婦が市郎右衛門を寝間に案内すると、市郎右衛門は寝間の入口で棒立ちになった。

「このふとんは何じゃ。わしの身分では、こんなぜいたくなふとんには寝られぬ」

用意したふとんは、唐花からばなの綾あやのある紺地どんす緞子に裏は白羽二重のまだ新しいものである。

栄一はあわてて、

「父上、ぜいたくといわれますが、これは木綿地のものとかわらぬ安い値で仕入れたものです」
「いや、そういうことをいっても……」

「うそではありませぬ。わたしが懇意にしている神田の梅田という武具商が、御一新のどきくさで、大名衆や旗本衆からいろいろな品物の処分をたのまれ、二束三文でひきとっては、安う売り廻ってくるのでございます。この寝具も、梅田の女房がとびきり安いからと持ってきたものなのです」

市郎右衛門は、首を横にふり続けた。

「事情はどうであらうと、わしは身分不相応のものは近づけるのもいやじゃ。おまえは殿さまだが、わしは相変らず百姓。微を防ぎ、漸を杜^{ふさ}がねばならぬ。百姓の身で、どうしてこんな絹物を着て楽々と寝ることができよう」

「そうは申されても父上、いまにわか木綿地のものの用意は……」

「用意せいといっているのではない。わしはただ、絹のふとんに近づきたくないといっているだけだ。いや、このお邸も、わしの分には合わぬ。やっぱり、わしは宿へ行く」

「宿といわれても」

「馬喰町^{ばくろちよう}に、村の衆が横浜へ行くとき泊る商人宿がある」

「構わんでいただきたい、殿さま、奥さま」
「構わんでいただいて追いかけていた栄一たちが、そういわれて、調子が狂ってしまった。」

「それでは、殿さま奥さま、ごきげんよろしゅう」

市郎右衛門は、むつかしい顔をして会釈をすると、そのまま玄関から足早に出て行ってしまった。

土間に下りて追いかけようとする千代を、栄一がひきとめた。

「追わぬがよい。父上があわてて、けがでもされては困る」

そういつてから、闇に向つて、ふつと息をはいた。

「父上は、ああいうおひとじゃ、そうだろ、奥さま」

大隈からは「一柱の神」だといわれ、父親には「殿さま」といわれる生活。たしかに、生活は悪くなかった。たとえば栄一の上司である大蔵少輔伊藤博文の月給が二百五十両。当時は、米一石が三両であり、今日の米価で換算すると、月給約百八十万円にもなろう。町では、「官員さま」はもてはやされ、肩で風を切っていた。

だが、栄一に問題なのは、給与や待遇でもなければ、見栄や名誉心でもない。痛快な国づくりの仕事ができるかどうかである。しばらくつとめてみたが、その点では、栄一は不満であった。

日常的な仕事は、いくらでもあった。幕府の勘定所の仕事をそのまま踏襲したような仕事もあれば、御一新の処理に伴う仕事もある。（御一新になったが、従前どおりでよいか）という各種各様の問合せが、全国からくる。たとえば、何藩の租米を運ぶ方法はどうするか。何々藩の寺領のあつかいは従前どおりでよいか。何々々藩の田畑の境界のきめ方は変えなくてよいのか等々。まちがいがあるとは困ると、何でも中央にきいてくる。このため、大蔵省内には、連日、縁日のように人が出入りした。そして、役人もまた、自信がないため、あちらへ行ったり、こちらへ行ったり。大蔵卿はじめ属吏にいたるまでがそうである。ただあたふたと、その場その場の問題に追

われ、とりつくろっている中、一日が終つて、夕方になり退庁。次の日もまた、同じように、あたふたとはいじまる。

大蔵省吏としての栄一の受けた印象は、「省中ただ雑沓ざつとく」ということであつた。

栄一自身の仕事もまた、雑沓の觀があつた。物の動き、人の動き、土地の動きには、税の動きの伴うものが多いので、何彼なにかにつけて、租税正あつかいの仕事かふえる。租税正の意見はどうかと、ひっぱり出される。さらに、對外關係の雜用も加わる。たとえば、当時は、旧幕時代からのさまざまな貨幣が流通し、中に、贋にせの貨幣や改鑄した惡貨がいりまじっていたため、外国代表團からの抗議が絶えなかつた。

このため、外人がいちばん保有していると思われる二分金について、その眞贋しんがんを判定してやらねばならなくなり、全国の開港場において検査を行い、眞贋それぞれ紙包みにして封印し、後日、贋貨の包みはすべて眞貨と交換した。すると、今度はその封印を偽造したり、中身をすりかえたりする者が出てきて、また外国代表團から苦情がきた。それではいっそ、二分金をメキシコ銀に交換してあげようということになり、このため、栄一がわざわざ横浜へ出張した。ところが、あれほどやかましく苦情をいつていたのに、交換に現われたのは、たった一人という始末。

ただでさえいそがしいのに、こんな風に、あちからもこちからもひっぱり廻され、落着くひまがなかつた。とても「八百万やまゝの神達、神計りに計る」というような状態ではない。神さまが社殿から下りて、連日、大道商人のまねをしているようなものである。

このままでは、いかに人材を集めようと、新しい国づくりなど、できるものではない。神さまには神さまらしく、別途、じっくり国づくりを考えさせるべきではないか。

栄一の建白癖が頭をもたげた。

上役の伊藤博文に話してみた。伊藤は栄一より一歳年下で、まだ三十にもなっていない。栄一が横浜焼打ちを計画したころ、井上とともに品川のイギリス公使館に火をつけた男である。栄一とは、はじめから、うまが合った。

「そうだ、きみの考えるとおりで」

と、伊藤も大きくうなずく。栄一はそこで、大蔵大輔大隈重信あてに、あらためて建白書を書いた。

巻

（国家の大計をはかり、庶政の改新をはかるには、第一に、改正のこのみを討議する組織を設けることが必要である。至急、省内の有為の人材をその局に集め、調査研究に携わらせるべきである）

下

もちろん、大隈に異存はない。直ちに栄一を掛長とし、改正掛を発足させた。栄一の建白どおり、有為の人材を集め、調査研究を経て、旧制度の改革、新制度の施設の方法例規を立案させるという特別の部局である。新国家のための智慧袋ちえぶくろといえる。省内から前島密ひそか、杉浦譲ら、俊秀十余名が選抜された。

もつとも、神さま不足の折である。彼等を第一線からひきぬくわけにいかぬ。栄一はじめ全員、現職と兼任のまま、「改正」の大事業にとり組むことになった。神々の集つどいにふさわしく、合議体とした。栄一は掛長といっても、主宰するだけで、とくに長としてふるまわない。

伊達大蔵卿、大隈大蔵大輔、伊藤大蔵少輔など、大臣や次官に当る連中も顔を出したが、彼等もここでは合議体の一員、一柱の神でしかなかった。自由で理想的なブレインの形態である。

掛員たちはみな、書生氣質^{かたぎ}の抜けない血氣さかなな面々ばかり。それぞれ研究したり見聞した結果を持寄って、討議する。いや、討議というより、ときに談判となり、激論となる。「改正掛で、また、けんかだ」という声をきいて、来訪者などは、本当のけんかかと、びっくりする。共通するのは、国づくりの熱っぽい情熱で、互いに他意はない。すぐ、氣心を知合った。遠慮のない書生づき合いとなり、この上なく愉快な仕事の間となった。

討議するのは、「貨幣制度をどうするか」「税制はいかにするか」などといった国家の根幹となる制度づくりからはじまって、全国測量、度量衡の改正、^{えきてい}駅通法（郵便）の改革、鉄道の敷設等等といった大問題ばかりである。

鉄道建設については、「不急不用の土木工事である」「沿道宿駅の旅舎人足の生業を奪う」「外国資金を借りるのは売国の所業である」などという猛反対が起っていた。これに対し、改正掛であらためて立案し建議することで、反対の世論をおさえ、新橋横浜間の着工にふみ切らせた。改正掛の討議には、それほどの権威が持たれるようになった。

改正掛では、みな争って勉強するのだが、見聞も浅いし、資料も不足している。情熱だけあっても、どうにもなくなることがある。もちろん、意見を徴すべき民間人といったものも、ほとんど居ない。それでも、何とかして少しでも智慧をひき出していきたい。

栄一は、度量衡改正の意見書をつくるとき、福沢諭吉の見解をききに行った。国家のため、新たに正しい尺度をつくらうという時節。度量衡も文字どおり、その尺度のひとつである。西洋事情に明るい福沢先生ならと、思いこんで出かけた。

福沢は、とまどった顔をした。しばらく話して栄一は、（内科の医者へ外科の膏藥^{こうやく}をもらいに

きたようなものだ」と、気づいた。

それでも福沢は、別に栄一の思いちがいをとがめたりはせず、自作の『世界国尽』^{くにづくし}『西洋事情』などを開いて話してくれた。本題はさておき、という感じで、栄一は一風変ったひとだと思った。省の外に居る神さまの一柱でもある。

栄一たちの「改正」熱に、若い上役の伊藤博文は居たたまれなくなった。

「おれはもう一ぺん調べてきたいから、アメリカへ行くぞ」

伊藤は栄一にたのんで、伊藤を派遣する必要がある旨の太政官あての大蔵卿名の願書を書かせ、とび立つようにアメリカへ行ってしまった。代りに、伊藤の焼打ち仲間である井上馨^{かおる}が大蔵少輔に就任した。かつて大隈を中央へ推薦した井上だが、今度は大隈大蔵大輔のすぐ下の少輔の地位についたわけである。

負けぬ気の強い伊藤は、アメリカで猛勉強した。その結果、金本位制度を採用すべきこと、紙幣発行会社（つまり銀行券を発行する私立銀行）を設立すること、流通している金札を回収するため公債（金札引換公債証書）を発行すべきことなどといった「改正」案を建議してきた。栄一たち改正掛全員を相手に、はるばる「改正」案をぶつけてきたのである。若い神々のはり合いであった。

改正掛を中心に、省内ではげしい議論が起った。栄一には伊藤の構想がのみこめたが、大隈や井上には、くり返し説明しても、なかなか理解ができない。それぞれ首をかしげるばかりである。栄一自身も、必ずしも伊藤の構想に全面的に賛成ではない。

太平洋をへだてて、栄一と伊藤は手紙でやり合った。公債は時期を待って発行しよう。ナシヨ